

『枕草子』「五月の御精進のほど」における「雨」の表現

— 郭公探訪の表現と構成意図を巡って —

一、はじめに

小 澤 恵里奈

『枕草子』第九五段「五月の御精進のほど」章段を巡っては、前半の郭公探訪と後半の詠歌御免をいかに統一的に構成されたものとして読むかが問題となってきた。かつて金子元臣氏は本章段を「名文」と評しながらも、章段構成が「統一を缺く」ために「やはり「廿日ばかりありて云々」以下は、別段とする方が纏りがいい。」と評したが、これに対して諸先学は、各エピソードを関連付けながら本章段が一つの章段として構成されていることの意義について明らかにしてきている。とりわけ前半の郭公探訪を巡っては、その和歌的性格と離脱を論じること、後半の詠歌御免のエピソードに関連付けられてきた。

たとえば、車田直美氏は本章段の郭公探訪が、『後拾遺集』歌人たちに見られる「尋郭公」という作歌活動を意識したものであったことを指摘しつつも、結局のところ後半の詠歌御免は和歌という表現形態に清少納言の文学的資質が収まらなかったことを示して

いるとする²。また古瀬雅義氏は九五段の郭公探訪が、『袋草子』の郭公秀歌五首の状況や、郭公歌の伝統的な趣向と合わないものであるため、新しい趣向の郭公歌を創造しようとしていたが結果として詠めなかったと解釈する³。両氏とも、清少納言の詠歌意識への見解は異なるが、郭公探訪の和歌的性格と清少納言の和歌からの離脱を探りながら、歌が詠めなかった理由を清少納言の問題として捉え、そのために詠歌御免を願うのだと考える点で共通している。

同時にこれまで先の車田氏・古瀬氏のように、郭公探訪は詠歌を目指して書かれたものでありながらも、結果的に和歌に結びつかなかったのだと考えられてきた。確かに和歌的表現や行動様式に沿いながらも、和歌的情趣と結びつかない点が郭公探訪の特徴となっていると考えられる。しかし、そもそも郭公探訪の表現は詠歌に相応しい状況を描き出す事を目指して書かれたものなのだ

ろうか。

歌が詠まれないことを巡って郭公探訪の叙述を明確に位置付けたのは三田村雅子氏であった。三田村氏は『枕草子』に「歌語り」からの離脱を読みとりつつ、「ウタを詠むべく用意された周辺への叙述の細やかさが、ついにウタそのものを圧倒して、もはやウタによる意味づけを必要としない所まで来ている」章段として九五段を位置付ける。このような三田村氏の捉え方は九五段の構成を明らかにする上で有効な手立てとなってきた。

しかし後に詳述するが、郭公探訪が詠歌に相応しい状況を作りだそうとして描かれたものとして捉えてしまうと、見逃してしまう問題があるのではないだろうか。むしろ郭公探訪を、詠歌がないうことへ向けて叙述されていると捉えることによって、九五段の表現や構成意図をより理解しやすくなるのではないか。つまり、歌を詠まないことが自然な展開として読まれるよう、歌を詠めないようなものとして郭公探訪は意図的に描かれていると捉えるべきではないかと考えるのである。このような捉え方をする、小森潔氏の見解を参考にしたい。小森氏は、九五段に見られる「歌語り」の枠組みからの脱却と言う観点で、その構成を次のように述べている。

詠歌御免のエピソードについては、清少納言自身の和歌詠作への劣等意識、それとは反転した自負、あるいは父元輔への屈折した思いを捉える見方などが提示されているが、清少納言の心理にのみ解消すべきではない問題だ。当然詠まれて

しかるべき和歌が詠まれない状況を延々と引き延ばして「書く」ことによって、本章段は明確なストーリー性を獲得している。むしろ、詠歌御免のエピソードこそが本章段の「物語」のクライマックスに位置づけられていると考えてもよい。

小森氏が本章段に「明確なストーリー性」を看取し、詠歌御免を「クライマックス」と位置づけるように、郭公探訪は九五段の展開を意識して、すなわち歌が詠まれないという結末に向けて意図的に書かれているものではないだろうか。郭公探訪は成り行きに任せて書かれたのではなく、結末に向けて周到に表現が織り成されていると考えた方が、個々の景物やエピソードの表現意図をより理解しやすくなると思われる。

しかし当然ながら、九五段は最初から歌を詠まないことが前提となっているわけではない。郭公探訪を巡っては、歌を詠もうとして詠めなかったという清少納言たちの態度は一貫している。中宮定子から特別に許可を与えられた四人に詠歌義務があるのは当然であり、歌の詠めない事は女房として許されることではなかっただろう。ところが清少納言一行は何度か詠歌を試みながらも、明順邸でのパフォーマンズや「雨」などによって紛れてしまう。車田氏が「和歌の世界においては郭公との格好の組み合わせとされる五月雨が、単なる雨となつて皮肉にもその詠作を妨げる理由となる」と指摘しているように、本章段で描かれる「雨」は「五月雨」という和歌の景物として書かれているように思われるものの、和歌に結び付くどころか詠歌を邪魔するものとして機能しているの

である。

この九五段における「雨」に着目してみると、冒頭で郭公探訪の提案を促すところから、ついに詠歌の出来なかつた五月五日の暮れ方まで描かれているが、「二日ばかりありて」以後には一切見られなくなる。言い換えれば、本章段の「雨」は郭公探訪の、提案から終結までに関わつて描かれているものなのである。このことから、本章段の「雨」が単に記録として書かれているというよりも、郭公探訪を形作る表現に関わつて描かれているものだと考えられないだろうか。

郭公探訪における「卯の花」などの景物や、「尋郭公」という行動様式は、「郭公」の和歌的表現に導かれて取り入れられているものである。そのように考えれば、本章段において繰り返し描かれる「雨」も「郭公」と組み合わせられるべき和歌的景物としての「五月雨」と捉えられるだろう。現在のところ、「雨」の表現については九五段の構成に関わつて具体的に検討する論は、管見の限りでは見られないように思われる。従来郭公探訪の表現を巡る先行論では、「郭公」「卯の花」「下蔵」等の景物の扱われ方から郭公探訪の和歌的情趣からの離脱を読みとり、後半の詠歌御免へと結び付けてきた。しかし、より直接的に詠歌を阻害する「雨」に着目することで、郭公探訪の表現が歌を詠まないことを前提に作り込まれていることがより明確に見えてくるのではないだろうか。更なる見通しを言うならば、九五段の「雨」の描写は他章段や他作品の「雨」の描写方法とは異なる点を持ち、そのことが九五段の枠組みと関わりながら独自の散文表現を作り上げている一端となってい

るのではないかと考える。

九五段の散文形態については「歌語り」という枠組みから既に多くの論が出されているが、その中でも既に挙げた小森氏の論に着目したい。小森氏は「ほかならぬ和歌を核とする「歌語り」に歌への依存から抜け出そうとする「意志」が絡まって新しい形態の散文が生成される」という図式を九五段が象徴的に示しているのだと捉えている^⑧。このような小森氏の論を視野に入れた時、郭公探訪における種々の表現について単に和歌的表現との距離を指摘するだけではなく、散文形態としての描写の方法にも着目することによって本章段の散文創造がどのように行われていったのかをより具体的に考えることができるのではないだろうか。

また本章段においては解釈の揺れだけでなく、政治的な意図を読みとる論^⑨なども出されている。こうした研究状況は、多様な読みを誘発するような叙述が九五段で為されているためとも言えるのではないか。本稿では歴史的な背景を含めて論じるまでには至らないが、九五段における散文創造の在り方と表現の意図を読みとっていくことで、九五段の解釈を行う手掛かりの一つとなることを目指したい。

以上のような問題意識のもと、本稿ではまず九五段の「雨」を他章段や他作品と比較検討し、本章段の「雨」の持つ特異性を明らかにしていく。その上で、他作品における「五月雨」と和歌との関係を確認しながら、本章段での「雨」が和歌と乖離していく様相を指摘し、九五段の構成とどのように関わるものなのかを明らかにする。

二、九五段における「雨」の特異性

まず「雨」の検討に先立って、次の表に作品毎の「雨」の総用例数と、文の内訳を示した。なお、九五段の「五月雨」に関わって、「五月雨」「時雨」「春雨」の用例数も併せて示しているが、「雨」の総数には含まれていない。

作品	雨	地の文	和歌	会話文	五月雨	時雨	春雨
枕草子	52	47	0	5	2	1	0
竹取物語	0	0	0	0	0	0	0
伊勢物語	9	4	3	2	0	0	0
平中物語	1	1	0	0	0	4	1
大和物語	13	7	4	2	1	4	0
宇津保物語	17	13	2	2	6	12	9
落窪物語	19	7	2	10	0	0	0
源氏物語	39	24	6	9	6	19	3
土佐日記	10	10	0	0	0	0	0
蜻蛉日記	41	37	1	3	4	6	1
紫式部日記	1	0	0	1	0	3	0
和泉式部日記	16	6	7	3	2	6	0

このように、『枕草子』の「雨」は分量などを考慮しても、他作品に比べて多く描かれていると言える。文芸形態の違いも考慮しなければならぬだろうが、ひとまず『枕草子』では「雨」への着目が意識的にされていることが考えられる。

従来『枕草子』において、「雨」に対する評価は一貫していないこと、おおむね否定的に描かれていることなどが指摘されている^⑧。元々「雨」はそれほど強く固有性を有しているわけではないが、『枕草子』においては他作品と比較しても一層多様に「雨」が描かれており、一貫した使われ方や評価はむしろ見出し難いように思われる。むしろ、『枕草子』においてそれほど多様な「雨」が描かれていることにこそ着目すべきではないだろうか。

『枕草子』には三〇程の章段に、類聚・随想・回想など形式を問わず「雨」が書かれている^⑨。それらの章段には、男女の逢瀬に関わるものや、しみじみとした感慨を抱かせたり「あはれ」を導き出したりするもののほか、外出時の「雨」を厭うものなど「雨」に対し否定的な心情を持つものも見られる。確かにこれらの「雨」の描写や評価は統一されていないように思われる。しかし和歌や物語などの文芸形態を問わず他作品における「雨」の用例を検討していくと、「雨」の描き方にはある程度共通する表現の枠組みが見られる。そして、『枕草子』の多様な「雨」は先行・同時代文芸に描かれる「雨」の表現の枠組みの幾つかを、各章段ごとに受容していることが考えられるのである。このことから『枕草子』が先行文芸や同時代的な観念を意識した上で「雨」を描き出しているのだと言えるだろう。

ところが『枕草子』九五段「五月の御精進のほど」における「雨」は、『枕草子』の他章段や他作品と共通する部分も確かにあるものの、やはりそこには幾つかの特異性が見られる。では、九五段における「雨」が有する、他章段や他作品の「雨」との重なりと特異性について確認していく。まず本章段の冒頭を引用する。

五月の御精進のほど、職におはしますころ、塗籠の前の、二間なる所を、ことにしつらひたれば、例ざまならぬもをかし。ついたちより雨がちに曇り過ぐす。つれづれなるを、「郭公の声たづねに行かばや」と言ふを、われもわれもと出で立つ。

（九五段・一八四頁）

五月一日より「雨がちに曇り過ぐす」ことを余儀なくされ「つれづれ」を感じた女房達が郭公探訪の提案を行う。このような「雨」の「つれづれ」を破るように語りだされていく形式は『枕草子』回想章段の、七七段「御仏名のまたの日」七八段「頭中将のすずるなるそら言を聞きて」や、『源氏物語』『狭衣物語』等の物語類にも見られるもので、「雨」の類型表現の一つと言ってよいだろう。さらに『源氏物語』では「五月雨」の鬱屈に耐えかねて外出する様子も描かれている。

御妹の三の君、内裏わたりにてはかなうほのめきたまひしなごりの、れいの御心なれば、さすがに忘れもはてたまはず、わざともてなしたまはぬに、人の御心をのみ尽くしてはた

まふべかめるをも、このごろ残ることなく思し乱るる世のあはれのくさはひには思ひ出でたまふには、忍びがたくて、五月雨の空めづらしく晴れたる雲間に渡りたまふ。

（花散里巻・②二五三―一五四頁）

このように『源氏物語』にも「五月雨」の晴れ間を狙っての外出が見られ、「五月雨」の時期の外出の提案はそれほど珍しいものではないと言える。

九五段の特異性が明らかなのは、外出中に「雨」が降り始めてからの描写である。明順邸の訪問中に降り始めた「雨」は、帰参後も暗くなるまで降り続け、数度に渡ってその変化が書き留められている。通常、他作品において長時間降り続くような「雨」は記録的に描かれるものが大多数である。なお、「雨」の激しく降る様子が二度に渡って強調されるようなものもあるものの、詳細に変化を伝えるまでには至らない。しかし、そのような中でも例外的に『蜻蛉日記』中巻、天禄二年七月の初瀬詣の場面は詳細に「雨」を描いている。

それより立つほどに、雨風いみじく降りふぶく。三笠山をさしてゆくかひもなく、濡れまどふ人多かり。（中略）庭清げに、井もいと飲ままほしければ、むべ「宿りはすべし」と言ふらむと見えたり。いみじき雨いやまさりなれば、いふかひもなし。からうして、椿市にいたりて、例のごと、とかくして出で立つほどに、日も暮ればてぬ。雨や風、なほやまず、火ともし

たれど、吹き消ちて、いみじく暗ければ、夢の路のこちし
て、いとゆゆしく、いかなるにかとまで思ひまどふ。からう
して、祓殿にいたり着きけれど、雨も知らず、ただ水の声の
いとげしきをぞ、さななりと聞く。御堂にものするほどに、
こちわりなし。おぼろけに思ふこと多かれど、かくわりな
きにものおぼえずなりにたるべし、なにごとくも申さで、明け
ぬと言へど、雨なほおなじやうなり、昨夜にこりてむげに昼
になしつ。

『蜻蛉日記』中巻・天禄二年七月・二六〇～二六一頁

道綱母が春日から椿市に至り、そこで滞在するまでの記述であ
る。ここでは外出中に「雨」の降る様子が近接して繰り返して描か
れており、そのような点は『枕草子』九五段と似ている。しかし、
傍線部の「雨」を見ていくと、「雨風いみじく降りふぶく」から「い
みじき雨いやまさりなれば」と雨のますます強くなる様子を書く
ものの、その後は「雨や風、なほやまず」「雨も知らず、ただ水の
声のいとげしきをぞ、さななりと聞く」「雨なほおなじやうなり」
と、変わらない雨の激しさを伝えるのみで、激しさの強弱につい
ては描かない。むしろこの場面での「雨」の描写は、その変化で
はなく、「雨」の激しさが変わらないことに重点を置いていると考
えられる。

そもそも「雨」が一日中降り続ける時には、変化がないからこ
そ不都合や不快感を生じさせたり、特別な情感を生みだしたりす
るようである。従って、激しい「雨」や長時間降り続ける「雨」は、

引用部のように「雨」の変わらない様子を書くばかりで、あとは
止んだかどうかという点が書き留められる程度である。このこと
は、『蜻蛉日記』以外で「雨」が降り続くような場面、たとえば『落
窪物語』の雨夜訪問譚、『源氏物語』の浮舟失踪などでも同様のこ
とが言える。

一方、「五月の御精進のほど」における「雨」は、繰り返し描か
れながらその変化が捉えられ、強弱が書き込まれていく。このよ
うな変化する「雨」の描写は、他作品においてただ降り続ける「雨」
とは異なる役割を担っているのではないか。以下に、九五段にお
ける五月五日の「雨」が書かれる部分を引用する。なお、「雨」が
描かれている部分に傍線を付した。

① まかなひさわぐほどに、「雨降りぬ」と言へば、いそぎて
車に乗るに、「さてこの歌は、ここにてこそよまめ」など
言へば、「さはれ、道にても」など言ひて、みな乗りぬ。
卯の花のいみじう咲きたるを折りて、車の簾、かたはら
などにさしあまりて、おそひ、棟などに、長き枝を葺き
たるやうにさしたれば、ただ卯の花の垣根を牛にかけた
るぞと見ゆる。供なるをのこどもも、いみじう笑ひつつ、
「ここまだし、ここまだし」と、さしあへり。

(九五段・一八六～一八七頁)

② 「歌はいかが。それ聞かむ」とのたまへば、「今、御前に
御覽せさせて後こそ」など言ふほどに雨まこと降りぬ。「な

どかこと御門御門のやうにもあらず、土御門しも、頭もなくしそめけむと、今日こそいとにくけれ」など言ひて、「いかで帰らむとすらむ。こなたさまは、ただおくれじと思ひつるに、人目も知らず走られつるを。あう行かむ事こそいとすさまじけれ」とのたまへば、「いざ給へかし。内へ」と言ふ。「烏帽子にてはいかでか」「取りにやりたまへかし」など言ふに、まめやかに降れば、笠もなきをのこども、ただ引きに引き入れつ。一条殿より傘持て来たるをささせて、うち見返りつつ、こたみはゆるゆると物憂げにて、卯の花ばかりを取りておはするもをかし。

(九五段・一八八―一八九頁)

③

「宰相の君、書きたまへ」と言ふを、「なほそこに」など言ふほどに、かきくらし雨降りて、神いとおそろしう鳴りたれば、物もおぼえず、ただおそろしきに、御格子まゐりわたしまどひしほどに、この事も忘れぬ。いと久しう鳴りて、すこしやむほどには暗うなりぬ。ただいま、なほこの返事奉らむとて、取りむかふに、人々、上達部など、神の事申しにまゐりたまへれば、西面に出であて、物聞えなどするにまぎれぬ。

(九五段・一九〇頁)

まず「雨」の強さについて見ると、明順邸で弱く降りだしたと考えられる「雨」は、「雨まこと降りぬ」と勢いを強め「まめやかに降る」と藤侍従が帰らざるを得ないような本降りになったことを示

す。更に帰参したところで「かきくらし雨降りて、神いとおそろしう鳴りたれば」と最も激しく雨が降る様子を描き、最後には小康状態になって日が暮れていく。このように九五段では、「雨」が変わらず降り続けるような記述ではなく、降り続く「雨」の中に勢力の強弱を捉え、描写していくという筆致が確認できる。さらに「雨」の強さを修飾する言葉を「まこと」「まめやかに」「かきくらし」と三度変えて描写することで、先の『蜻蛉日記』引用部のような「いみじき雨いやまさりなれば」という表現よりも、段階的に強くなっていくことをより具体的に伝えている。

そして、この変化する「雨」は人々の行動にも変化を起こさせ、話の展開を促していく働きを担っている。引用部の三つの場面で「雨」は詠歌の話題に伴って描かれながらも、結局和歌に結び付かず次なる展開へと人々を動かしていく。①で降り始めた「雨」は一行を明順邸から急いで出発させ、さらに詠歌の提案を帰途へと引きのばさせつつ、帰途卯の花に興じる展開へ繋げていく。②では歌を聞こうとする藤侍従とのやりとりの最中に「雨」が強めに降り、別の話へと流れていきつつ、さらに雨脚が強くなったために藤侍従がやむなく帰っていく。③では藤侍従への返歌を譲り合う女房達を強い雷雨が驚かせ、御格子を下ろしに向かわせている。このように本章段での「雨」の描写は、歌の話題とともに書かれるものの、それまでの流れを中断する形で次の展開へと進んでいるのである。

なお「雨」によって場面が活性化するものとしては、『伊勢物語』六段のように緊迫感のある場面で用いられるものがある。そのよ

うな「雨」は『うつほ物語』俊陰巻における俊陰と阿修羅との遭遇、『源氏物語』における光源氏と朧月夜との密会、光源氏の明石への船路など複数の作品に跨って一定数見られ、類型的な表現であると考えられる。ただしそれらは危機的な状況や非常事態において緊迫感を増すような「雨」であり、九五段における「雨」の役割とはやはり異なっていると言えよう。九五段では、変化する「雨」によって次々と場面が展開し、行動を変えていく人々の様子が描かれているが、そうした「雨」は郭公探訪に更なる興を加え、面白さや楽しさへと繋げていくような効果を果たしている。

さらに本章段の「雨」は、通常嫌がられるものである外出中の「雨」のように、不便さや不満を露にするようなものではない。『枕草子』一一七段「いみじう心づきなきもの」の一つに「物へ行き、寺へも詣づる日の雨」が挙げられているが、そうした捉え方とも一線を画するものと言えよう。

以上、その描写方法と役割、効果の点から、本章段における「雨」は他作品や他章段と比較しても特異性を有する表現を持つものだと言える。そしてそのことは、本章段において「雨」が意図的に描き込まれていることを示すと考えられないだろうか。つまり単なる記録でもなく、また他作品や他章段と共通する類型的な「雨」でもなく、九五段の「雨」は本章段の展開に関する意図に基づいて描写されているものではないかと考えるのである。本章段の「雨」は歌の話題を中断するように描かれると同時に、郭公探訪を新たに展開させる契機ともなっており、本章段の構成と連関があるように思われる。次節では、「雨」と歌との関わりに焦

点を当て、本章段の「雨」の位置付けをより明確にしていきたい。

三、和歌から乖離する「五月雨」

郭公探訪の中に描かれる「雨」が詠歌の話題を伴っていないが、そこから話をそらすように別の展開が導かれていることは前節で確認した通りである。しかし、そもそも『枕草子』以外に「雨」が書かれる場合、特に五月の「雨」すなわち「五月雨」と「郭公」が取り合わされる時、それらはどのように描かれ、用いられるのだろうか。また、「五月雨」や「郭公」の和歌と、散文による周辺記述とはどのように関わっているのか。それらの確認を行いながら、九五段において描かれる「五月雨」の性質の位置付けを検討していく。

まず、和歌における「五月雨」の使用について確認を行う。「五月雨」という語が見られるようになるのは『古今集』の以下の三例からで、「五月雨」は全て「ほととぎす」と一緒に詠まれている。

寛平御時后の宮の歌合の歌

五月雨に物思ひをれば時鳥夜深く鳴きていづち行くらむ

(古今・夏・一五三・紀友則)

郭公の鳴くを聞きてよめる

五月雨の空もどろに郭公なにを憂しとか夜ただなくらむ

(古今・夏・一六〇・紀貫之)

古歌奉りし時の目録のその長歌

ちはやぶる 神の御代より 呉竹の よよにも絶えず 天彦
の 音羽の山の 春霞 思ひ乱れて 五月雨の 空もどろ
に さ夜ふけて 山郭公 鳴くごとに 誰も寝て 唐錦
龍田の山の もみじ葉を …(略)

(古今・雑歌・一〇〇二・紀貫之)

これらの歌は、全て「夜」であること、「ほととぎす」の声を聞くこと、「物思ひ」「憂し」「思ひ乱れ」といった鬱屈した心情であることが共通している。『後撰集』『拾遺集』での「五月雨」の用例数はそれぞれ五例で、『古今集』ほどの定型表現ではなくなるものの、やはり「ほととぎす」との組み合わせ、或いは「ながむ」などの心情と結びついて詠まれる傾向が確認できる。

次に散文作品での「五月雨」を見ると、前掲表の通り『大和物語』『うつほ物語』『落窪物語』『蜻蛉日記』『源氏物語』『和泉式部日記』などに使われているが、用例の大多数は和歌か会話文である。それらの使用法は和歌と同じく、鬱屈とした心情に結び付くか、「雨」と同じく「つれづれ」を感じるもの、忌月のために結婚できない時期を指す言葉として使われているものが確認できる。なお、結婚を忌む時期としての「五月雨」は『信明集』にも見られ、散文表現のみの用例ではない。以上のことから、散文作品においては原則として「五月雨」は和歌に詠まれるか、または和歌的表現に即して描かれていると言えよう。

さらに、「五月雨」が「ほととぎす」と共に描かれるような場面

では、必ずと言っていいほどに和歌が詠まれていることが確認できる。たとえば、『源氏物語』幻巻では次のように五月の夜の場面を描き始める。

五月雨はいとどながめ暮らしたまふより外のことなくさうさうしきに、十余日の月はなやかにさし出でたる雲間のめづらしきに、大将の君御前にさぶらひたまふ。花橋の月影にいときはやかに見ゆるかをりも、追風なつかしければ、①「千代をならせる声」もせなんと待たるほどに、にはかに立ち出づるむら雲のけしきいとあやにくにて、②おどろおどろしう降り来る雨に添ひて、さと吹く風に灯籠も吹きまどはして、空暗き心地するに、「窓をうつ声」など、めづらしからぬ古言をうち誦したまへるも、
(幻巻・④五三九頁)

波線部「五月雨」の時期の雲間の夜に、亡くなった紫の上を偲ぶ源氏のところへ夕霧が訪れる場面である。橘など五月の和歌的景物を取り入れた風景描写の後、波線部①で郭公の声を待ち望む光源氏の様子が描かれ、波線部②では「雨」が降りだしてくる。実景としての「五月雨」と言えよう。この場面からは「五月雨」の和歌と共通するような、「ながめ暮らし給ふ」「さうさうし」という心情表現も見られ、和歌的情趣に沿った「五月雨」だと言える。光源氏がそのまま夕霧と話をしていると、郭公の声が聞こえてくる。

何ごとにつけても、忍びがたき御心弱さのつつましくて、過ぎにしこといたうものたまひ出でぬに、待たれつるほととぎすのほのかにうち鳴きたるも、「いかに知りてか」と、聞く人たゞならず、

なき人をしのぶる宵のむら雨に濡れてや来つる山ほととぎす

とて、いとど空をながめたまふ。大将、

ほととぎす君につてなんふるさとの花橘はいまぞさかりと

(幻巻・④五四一―五四二頁)

傍線部では待ち望んだ郭公の声が聞こえ、歌を詠むに至るまでが書かれている。波線部では先の引用部で降りだした「五月雨」に濡れているであろう「ほととぎす」を描写し、歌に詠みこむ。ここで「五月雨」と「ほととぎす」が共に描写され、和歌として結び付けられる点、さらにはそれまで詠まれていなかった和歌が、「ほととぎす」の到来ですぐに詠まれる点に着目したい。ここからは、「五月雨」が書かれ、そこに「ほととぎす」が聞こえる時に和歌に結び付くという構図が見られる。そしてこのような構図は、『蜻蛉日記』にも意識されているように思われる。

このごろ、雲のたたずまひ静心なくて、ともすれば、田子の裳裾思ひやらるる。ほととぎすの声も聞かず。もの思はしき人は、寝こそ寝られざなれ、あやしう心よう寝らるるけなるべし。これもかれも、「一夜聞きき」「このあかつきにも鳴

きつる」と言ふを、人しもこそあれ、われしもまだしと言はむも、いと恥づかしければ、もの言はで、心のうちにおぼゆるやう、

われぞけにとけて寝らめやほととぎすもの思ひまさる声となるらむ

とぞ、しのびて言はれける。

(『蜻蛉日記』下巻・天禄三年五月・三〇二頁)

「五月雨」が降り続けるころ、道綱母がほととぎすの声を聞くことができず、物思いの多い自分が聞かないのは恥づかしいことだと思ひながら独詠する場面である。傍線部の「田子の裳裾」は和歌的な発想の言葉であろう。この場面では郭公の声を聞いているに、ことに焦る様子が見られ、「五月雨」のところに「物思ふ」人が「ほととぎす」を聞かないのはおかしいことだという、和歌的通念の強固さを浮かび上がらせていると考えられる。つまり、「五月雨」歌の典型である「物思ひ」という心情をすでに道綱母は抱いているために、そのような心情に結び付く和歌的景物「五月雨」「郭公」への連想を基に独詠へと展開していくのである。さらに和歌の中で、自分自身の声が郭公の声なのだを重ねており、郭公の声は聞かれなくとも「五月雨」に合わせて「郭公」歌を詠もうとする意志が読みとれる。

このような『源氏物語』『蜻蛉日記』の引用部からは、「五月雨」と「郭公」との組み合わせをもとに、詠歌を意識していくという構図が確認出来る。「五月雨」も「ほととぎす」も、単体で多く和歌

と結びつきやすいものではあるが、ともに用いられている時にはほぼ必ずと言っていいほどに和歌と結びつくものだと考えられるのではないだろうか。同時に重要なのは、和歌を導く周辺の記述が和歌的情趣に沿って描かれている点である。「五月雨」と「郭公」が和歌的情趣を有することが、和歌に結び付いていく必然性を生みだしていくのだと考えられる。

さて、『枕草子』に戻って「五月雨」という語の用例を確認すると、三九段「鳥は」と九五段「五月の御精進のほど」の二例が見られる。兩章段とも「五月雨」の和歌はないが、「五月雨」「郭公」の扱い方に対する態度は異なっている。三九段「鳥は」では「郭公」の情趣を褒める中で、「五月雨」の「夜」に「郭公」の声を聞きたいと書かれており、和歌的表現に即していることは明らかである。ただし三九段には心情表現も詠歌もないが、和歌的通念を現実求めようとする点で『蜻蛉日記』の先の引用部と共通するものだと言える。

一方、九五段における「五月雨」は、車を寄せるという特別な振舞いを許される時期を指す言葉として使われており、他には見られない用例である。そして、郭公探訪において実景として降る「雨」は心情に結び付かず、その描写は第二節で確認した通り、表現も心情も「五月雨」の和歌的情趣と結びつくものとは言い難い。つまり、九五段の「五月雨」は「郭公」との取り合わせという和歌との接点を持ちながらも、その内実は和歌的情趣とそぐわないものであったのである。だからこそ、『源氏物語』や『蜻蛉日記』のように、容易に和歌に結び付かないのである。さらに言い換えられ

ば、「五月雨」と「郭公」との組み合わせであっても、和歌に結び付くのが容易でないように見せるために、意図的に和歌的情趣から乖離させた形で「五月雨」を描いているのではないだろうかと考える。

既に明らかにした通り、本章段の「五月雨」は「ほととぎす」と共に用いられながらも和歌に結び付かないだけでなく、詠歌を邪魔するような形で書かれている。このことから、単に「五月雨」が和歌的情趣に結び付かないために歌として詠まれないというだけでなく、より積極的な役割を持った表現として書かれていることが考えられる。では、本章段の展開に「雨」がいかに関わって、詠歌御免へと結びつく表現を形成しているのか。詠歌を巡る問題や、他の景物とも併せて次節で論じていく。

四、詠歌御免へ向けた郭公探訪の表現

先に述べたように、郭公探訪で詠歌のない理由を清少納言の文学的資質に求めるような考えは早くから見られ、現在でも根強く存在する。そうした考えは次の清少納言の発言によるものである。

「何か。この歌よみはべらじとなむ思ひはべるを。物のをりなど、人のよみはべらむにも、『よめ』など仰せられば、え候ふまじき心地なむしはべる。いとかがは、文字の数知らず、春は冬の歌、秋は梅、花の歌などをよむやうははべらむ。なれど、歌よむと言はれし末々は、すこし人よりまさりて、『そ

のをりの歌は、これこそありけれ。さは言へど、それが子なれば』など言はればこそ、かひある心地もしはべらめ。つゆとりわきたる方もなくて、さすがに歌がましう、われはと思へるさまに、最初によみ出ではべらむ、亡き人のためにもいとほしうはべる」

(九五段・一九一〜一九二頁)

引用部は郭公探訪の二日後、中宮定子に対する清少納言の詠歌御免の願い出である。ここで清少納言は「この歌よみ侍らじとなむ思ひはべるを」というように詠歌を拒否し、その理由を歌人の娘であるためとする。この発言からは、あたかも清少納言が元々歌を詠む気がなかったように受け取れる。

しかし五月五日の時点での、清少納言の詠歌に対する態度はどうであろうか。五月五日において清少納言たちが詠歌を試みる姿は数回に渡って描かれ、その度に詠歌は果たされないままでいるのだが、そうした経緯が説明されている場面を以下に挙げる。

① 稲といふものを取り出でて、若き下衆どもの、きたなげならぬ、そのわたりの家のむすめなどひきもて来て、五、六人してこかせ、また見も知らぬくるべく物、二人して引かせて、歌うたはせなどするを、めづらしくて笑ふ。郭公の歌詠まむとしつる、まぎれぬ。

(九五段・一八五〜一八六頁)

② まかなひさわぐほかに、「雨降りぬ」と言へば、いそぎて車に乗るに、「さてこの歌は、ここにてこそよまめ」など言へば、「さ

はれ、道にても」など言ひて、みな乗りぬ。

(九五段・一八六頁)

③ 藤侍従、ありつる花につけて、卯の花の薄様に書きたり。この歌おぼえず。これが返しまづせむなど、硯取りに局にやれば、「ただこれしてとく言へ」とて、御硯蓋に紙などして給はせたる。「宰相の君、書きたまへ」と言ふを、「なほそこに」など言ふほどに、かきくらし雨降りて、神いとおそろしう鳴りたれば、物もおぼえず、ただおそろしきに、御格子まゐりわたしまどひしほどに、この事も忘れぬ。

(九五段・一八九〜一九〇頁)

④ いと久しう鳴りて、すこしやむほどには暗うなりぬ。ただいま、なほこの返事奉らむとて、取りむかふに、人々、上達部など、神の事申しにまゐりたまへれば、西面に出であて、物聞えなどするにまぎれぬ。

(九五段・一九〇頁)

まず傍線を付した部分は、清少納言たちが歌を詠もうとしていたことが確認できる箇所である。①では明順邸での見せ物のために、郭公の歌を詠もうとしていたのが「まぎれ」たと言う。次に②では清少納言或いは女房の誰かが詠歌を提案するが、帰参しながら詠めばいいと後回しになる。しかし結局詠めずに帰参した後、③では藤侍従からの歌への返歌をしようとするものの、雷雨のせいで「忘れ」てしまったという。雷雨が少し鳴りやんで④の場面では、藤侍従への返歌を再度試みるものの、応対に追われて「ま

ぎれ」てしまったとする。

引用部①③④に四角で囲った「まぎれぬ」「忘れぬ」という表現に端的に表れているように、清少納言たちは歌を詠もうとしていたが意図せず詠まないうまになつてしまったことを何度も述べるのである。そしてその理由を、①稲扱きの見せ物、②帰途を急ぐため後回し、③突然の雷雨、④雷雨見舞いの応対と、それぞれ一応の理由が示されていく。これら四つの記述は、清少納言たちが意図的に詠歌を拒否したのではなく、詠もうとして詠めなかったことを繰り返し伝えていく。また清少納言たちが詠歌義務を自覚していたことは、中宮定子に叱責された後の行動からも確認できる。

「くちをし」の事や。上人などの聞かむに、いかでか、つゆをか
しき事なくてはあらむ。その聞きつらむ所に、きとこそは
よままし。あまり儀式さだめつらむこそあやしけれ。ここ
にてもよめ。いと「言ふかひなし」などのたまはすれば、げに
と思ふに、いとわびしきを、言ひ合はせなどするほどに、

(九五段・一八九頁)

歌のないことの叱責を「げに」と受け止めた清少納言たちは、歌を詠む相談を「言ひ合はせなどする」とあるように、四人の女房達で詠歌義務を果たそうとする。このように、郭公探訪の帰参後も詠歌を試みる清少納言たちの姿が確認でき、詠歌をしなければならぬという意識が読みとれる。同時にここからは、郭公探訪

に出かけた女房達全員に詠歌義務がありながらも、結局のところ誰一人として詠めなかったことがわかる。郭公探訪において詠歌ができなかったのは清少納言だけではないのである。従って、郭公探訪で歌が詠まれない原因を、清少納言個人の文学的資質のみに帰することは難しいように思われる。むしろ、出かけた女房達の誰にとっても、郭公探訪は容易に詠歌を行えるようなものではなかったように語られているのではないだろうか。

つまり、郭公探訪において女房達はどうにか歌を詠もうとしていたものの、結局のところ誰も詠むことができなかったということとは、詠歌のないことが個人の問題ではなく、郭公探訪が歌を詠む場として適していなかったことを示唆していると考えられる。そしてその語りにしても、詠歌義務のある女房たち全員が歌を詠めなかったという、女房として許され難い事態を語ることを見据えてなされているのであろう。歌が詠まれないという結末を見据えた上で、郭公探訪譚の表現は周到に作り込まれているのである。

以上のことを踏まえて、郭公探訪における和歌的表現との関わりについて確認したい。山に郭公の声を尋ねに聞きに行くという行動様式が同時代の和歌の動向と同じものであることについては車田氏が明らかにしているが、そこで用いられている和歌的景物として、「五月雨」を除いた「郭公」「卯の花」はどのように描かれているのであろうか。まず「郭公」を見てみると、郭公探訪での記述は次の部分のみである。

げにぞかしがましと思ふばかりに鳴き合ひたる郭公の声を、

くちをしう、御前に聞こしめさせず、さばかりしたひつる人々をと思ふ。

(九五段・一八五頁)

ここで郭公は「昼間」「山里」で「かしがまし」と思うほどに群れて「鳴き合ひたる」と表現される。このような表現は和歌的情趣と照らし合わせるとどのような位置付けになるだろうか。古瀬氏の指摘による、『袋草子』の郭公秀歌五首から郭公歌の理想的な状況は「一声」「おぼつかなくも鳴きわたる」「暁かけて」聞くものだというものを参考にすると、理想的な状況と引用部とは食い違ったものとなる。確かに、三代集の中には、「山里」などで郭公を聞く趣向や、郭公に盛んに鳴くことを求める歌なども見られ、和歌に共通する部分が無いわけではない。しかし、やはり「昼間」に「かしがまし」と思うほど群れて「鳴き合ふ」というような郭公は、和歌的情趣に沿った表現とは言い難いと思われる。また明順卿も、稲扱きの見せ物が詠歌を忘れさせてしまったように、和歌的情趣を味わう空間としては描かれていないと言える。

次に、「卯の花」に着目すると次のように書かれている。

卯の花のいみじう咲きたるを折りて、車の簾、かたはらなどにさしあまりて、おそひ、棟などに、長き枝を葺きたるやうにさしたれば、ただ卯の花の垣根を牛にかけたるぞと見ゆる。供なるをのことも、いみじう笑ひつつ、「ここまだし、ここまだし」と、さしあへり。

(九五段・一八六―一八七頁)

「卯の花」は『万葉集』から用いられ、三代集にも夏の和歌的景物として定着しているものである。単独では「憂し」との同音反復や、花の白さ、卯の花の「垣根」などが詠まれる。「郭公」と用いられるときには、「郭公」が「卯の花」に宿りをするという考えのもと使われることが多い。

右の引用部に見られる「卯の花の垣根」も、伝統的な和歌的発想に基づき、郭公が宿りをするためのものとして擬したものであろう。しかし、引用部では「いみじう咲きたる」卯の花をあちこちに「さしあまりて」というように、「卯の花」は咲いた状態を鑑賞されるのではなく、車の過度な装飾品として用いられる。さらに「いみじう笑ひ」ながら「さしあへり」と続いており、和歌的発想に基づく「卯の花の垣根」を賞美することなく、装飾すること自体に興じ耽る様子が読みとれる。このような「卯の花」の使われ方は、和歌的情趣を感じさせることを目指した記述とは遠いように思われる。

以上、郭公探訪の中で扱われる夏の景物「郭公」「卯の花」「五月雨」は和歌的情趣とは異なり、五月の風景を和歌に沿って再現しようとして描かれたものではないと言える。「尋郭公」という作歌活動をなぞりながら、夏の典型的な景物へ着目していくというように、郭公探訪に十分和歌を詠む素地があったことは認められよう。しかし、それらは和歌的情趣に結び付かず描かれている。それはやはり「歌を詠もうとしても詠めなかった」という状況を作りだす事に向けて、郭公探訪を詠歌できるような趣とは異なったものとして描こうとしたためではないだろうか。詠歌義務を意識

し、歌を詠もうと努めながらも、それでも詠歌のできなかったことが仕方ないことであるかのように描くのである。そして、そのような郭公探訪を描くにあたつて「雨」が有効に機能している。「雨」は数回に渡つて書かれながらも、詠歌の話題を逸らすように場面を展開し、和歌の情趣とは異なつたものとして表現されている。このような「雨」は、歌を詠めなかつたという事態があたかも自然な展開のように描くという意図に基づいた表現であると考ええる。

五、おわりに

以上、本論では郭公探訪が「歌が詠まれないこと」へ向けて周到に表現されているものと捉え、そのような構成の中で「雨」が有効な手立てとして用いられていることを明らかにしてきた。九五段は従来清少納言の個人的な問題に重点が置かれ、郭公探訪から清少納言の文芸的資質を探る試みが為されてきた。しかし、郭公探訪で和歌が詠めなかつたのは四人の女房達全員であり、清少納言個人の問題のみには回収し難いように思われる。むしろ、女房達全員が歌を詠もうとしていたのにも関わらず詠めなかつたのだという弁明をするように、郭公探訪の表現が形づくられているのだと捉えるべきではないだろうか。そして、そのような表現を為す景物として「雨」が用いられているのである。「雨」は詠歌の話題を逸らしながら別の展開を導き、或いは直接的に詠歌を妨げるなどして容易に和歌に結び付かない状況を描いていく要因になっている。また「五月雨」「郭公」「卯の花」はいずれも和歌の情趣

とは異なり、それらの描写からも和歌のないことを自然なものとしようとしていることが確認できる。

従来九五段における「雨」は五月五日に相応しい背景として違和感を持たれることなく見過ごされてきた。しかし、その描写を他章段や他作品と比較してみた時、単なる事実の記録や類型的表現に従つて書かれただけとは言い難い特異性を有していることが確認できる。九五段の「雨」は、詠歌の話題を逸らしながら場面を次々に展開し、さらにそれは通常和歌が詠まれるような「五月雨」の情趣とも異なつた表現になっている。そのような九五段の「雨」は、本来歌があるはずの郭公探訪に歌がないことを自然に語りだしていくための、有効な仕掛けとして機能していると考えられる。

このような郭公探訪の捉え方は、結局歌が詠まれないことの理由を見えなくしてしまうように思われるかもしれない。しかし、郭公探訪や詠歌御免を清少納言の文学的資質にそのまま関連付けてそこに理由を探ろうとする試みでは、九五段の表現の特質は見えてこないのではないだろうか。九五段の表現や、構成の仕方、方法を検討していくことによって、『枕草子』の散文表現を考えていく際の重要な手掛かりが得られるものと思われる。

『枕草子』研究が表現に着目してから久しい。その主な対象は類聚・随想章段であり、論点については和歌的表現との近接或いは逸脱を読みとるというものが多くように思われる。しかし、他方、回想章段における散文表現を詳細に検討していくことで、『枕草子』の散文作品としての位置付けがより明確になってくるのではないだろうか。とりわけ本稿で論じたように、九五段では和歌との連

関の中で、『枕草子』の随想・類聚章段や他の散文作品との比較検討を行うことができるのではないかと考える。

このように、類聚・随想章段のみならず、回想章段の散文表現をも積極的に併せ見ていくことで、『枕草子』全体の表現の在り方を、今後も検討していくこととしたい。

注

- (1) 金子元臣『枕草子評釈』（明治書院、一九二一年）
- (2) 車田直美「『尋郭公』考——『枕草子』「五月の御精進のほど」の段をめぐって——」（『中古文学』（第五四号、一九九四年十一月）
- (3) 古瀬雅義「清少納言と郭公詠——郭公詠の伝統と創造の間の苦闘——」（『古代中世国文学』第六号、広島平安文学研究会、一九九五年三月）
- (4) 三田村雅子「歌語りからの離陸——ウタの空洞化——」（三田村雅子『枕草子 表現の論理』有精堂、一九九五年所収。初出は、『時代別日本文学史事典・中古篇』有精堂、一九九五年）
- (5) 小森潔『『枕草子』と『源氏物語』の〈散文への意志〉』（小森潔『枕草子 発信する力』翰林書房、二〇一二年所収。初出は「枕草子と和歌——枕草子と源氏物語の〈散文への意志〉」加藤睦・小島菜温子『源氏物語と和歌を学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇七年）
- (6) 同注（2）
- (7) 『枕草子』の「歌語り」については本章段に限らず先学が論じてきている。本章段については既に挙げたものの以外に次のものなどがある。大洋和俊『枕草子の〈言葉〉』（『日本文学』第四二巻九号、一九九三年九月）、同『枕草子と和歌の機能——「職の御曹司」章段群の特質——』（『静岡英和女学院短期大学紀要』第三二号、二〇〇〇年）。藤本宗利「五月の御精進のほど」の歌語り——和歌を相対化する下蔵」（藤本宗利『枕草子研究』風間書房、二〇〇二年所収。初出は、『枕草子の「食」——和歌を相対化する下蔵』『ことばが拓く古代文学史』笠間書院、一九九九年）など。
- (8) 同注（5）
- (9) 本章段に関して、史実背景と照応させ政治的意図を読みとろうとするものは土方洋一氏・津島知明氏のものがある。史実的背景を『枕草子』というテキストが抱え込んでしまう以上、『枕草子』の表現のみに終始するのまた本質を捉えそこなうことになるのではないかと考える。参考にしたい。土方洋一「詠まれなかった和歌——ほととぎす探訪——」（土方洋一『日記の声域——平安朝の一人称言説』右文書院、二〇〇七年所収。初出は『青山語文』第三二号、二〇〇二年三月）。津島知明「『内大臣』伊周の〈復権〉」（『枕草子論究 日記回想段の〈現実〉構成』翰林書房、二〇一四年所収。）
- (10) 消息・会話中の和歌における用例の場合、和歌の用例として計上し、会話の用例には入れていない。なお、引歌の部分

的な引用なども、和歌として数えている。

- (11) 「五月雨」「時雨」は動詞「五月雨（さみだる）」「時雨（しぐる）」の用例も計上している。また「春雨」には「春雨（はるのあめ）」も含む。

- (12) 村井順氏は各章段の「雨」の用例を検討し、それらがどのような条件下で否定的に書かれ、また肯定的に受け止められているのかを読みとっているものの、個々の指摘に留まっしてしまっている。村井順「枕草子」と自然 四、雨について」（村井順『枕草子その自然』笠間書院、一九七五年）また、「郭公」と併せて論じるものが幾つか見られる中で、李暁梅氏は『枕草子』の「五月雨」について「次第に変化する空模様を具体的、写實的に表現している」と述べている。李暁梅「ほととぎす」を通してみた清少納言の情——『古今和歌集』における「ほととぎす」の歌と比較して——（李暁梅『枕草子と漢籍』溪水社、二〇〇八年。初出は『日本言語與文化——孫宗光先生喜寿記念文集』北京大学出版社、二〇〇三年十二月）

- (13) なお『枕草子』の「雨」の用例は次の章段に見られる。「雨」の同一章段での記述数を括弧内に示した。一段、六段、八段、二七段、二八段、三五段（2）、三六段、三八段、四二段、六八段、七〇段、七七段、七八段（2）、八三段（2）、九四段、九五段（3）、九九段（2）、一一〇段、一一六段、一一七段、一一八段（3）、一二五段（2）、一三二段、一三三段、一八八段、一九〇段、二二四段、二二六段、

- 二六〇段（4）、二七四段（8）、二七五段（二）、二八四段（14）『落窪物語』における雨夜訪問譚や、『源氏物語』における光源氏の須磨から明石への船路、『蜻蛉日記』での初瀬詣など。なお和歌での用例は計上せず、散文及び会話での用例を数えている。

- (15) 能因本「雨降りぬべし」。雨がまだ降っていないとも捉えられるものの、いずれにせよ時間を置かず道中で卯の花車の遊びがあり、雨が降りそうな気配か、かすかな雨が降っている程度であろう。

- (16) 『新編国歌大観 CD-ROM 版 Ver.2』（角川書店、二〇〇三年）の検索によると、『後撰集』『拾遺集』において、「五月雨」を詠んだ和歌はそれぞれ以下の通りである。『後撰集』一六三番、一六六番、一八二番、一九〇番、二七七番。『拾遺集』一〇八番、一一六番、一一七番、一一八番、三九一番。『後撰集』では一六三番、一六六番歌の二例が「郭公」とともに用いられ、一八二番、一九〇番歌は「ながめ」という言葉が使われている。二七七番歌は秋歌のなかに「五月雨」を用いたものである。『拾遺集』では一〇八番歌を除いた四例は、全てほととぎすと組み合わされた和歌になっている。なお一〇八番歌は「よど川」「あやめ」「みくさ」と共に詠まれたものである。

- (17) 神代よりいむといふなる五月雨のこなたに人をみるよしもがな（『信明集』五六）

- (18) 『新編日本古典文学全集13 土佐日記 蜻蛉日記』（菊地靖彦、

木村正中、伊牟田経久、一九九五年）の次の頭注を参考にした。

明確な引歌を探りえないが、田に出て働く、特に田植をする農家の女性たちの裳の裾が、五月雨に濡れるという、和歌的な発想で、おそらくは田唄とも深い関わりがあろう。また働く女の姿に、作者は兼家との仲に苦しむ自己を投影して見る。『蜻蛉日記』下巻・三〇二頁）

(19) 同注(2)

(20) 古瀬雅義「ほととぎす」から「下蔵」へ——清少納言の意図した非和歌的世界志向——『国語国文論集』(第二十六号、安田女子大学日本文学会、一九九六年一月)

※本論の用例はそれぞれ以下の索引に拠るものである。

- ・『枕草子総索引』(松本博司監修、榊原邦彦・武山隆昭・塚原清・藤掛和美編集、右文書院、一九六七年)
- ・『歌物語 伊勢物語・平中物語・大和物語 総合語彙索引』(西端幸雄・木村雅則編集、勉誠社、一九九四年)
- ・『落窪物語総索引』(松尾聰・江口正弘編集、一九六七年)
- ・『うつほ物語の総合研究1』(室城秀之・西端幸雄・江戸英雄・稲員直子・志浦由紀恵・中村一夫、勉誠出版、一九九九年)
- ・『平安日記文学 土佐日記・蜻蛉日記・和泉式部日記・紫式部日記・更級日記 総合語彙索引』(西端幸雄・木村雅則・志浦由紀恵編集、勉誠社、一九九六年)

・『源氏物語 語彙用例 総索引 自立語篇 全五巻』(上田英代・村上征勝・今西祐一郎・樺島忠夫・上田祐一編集、勉誠社、一九九四年)

※引用の際使用している本文資料は以下の通りである。『枕草子』の引用にはそれぞれ引用部分末尾に章段数と頁数を括弧内に漢数字で記した。『枕草子』以外の本文については、同箇所作品名と頁数を示すものとしている。なお『古今集』以外の和歌資料については、『新編国歌大観』(角川書店)によった。引用の際、適宜ルビや記号を省略し、一部旧字体を新字体に表記を改めた箇所がある。また、特に断りのない限り、引用部における傍線・記号・注などは引用者によるものである。

- ・『新編日本古典文学全集18 枕草子』(松尾聰・永井和子校注・訳、小学館、一九九七年)
- ・『新編日本古典文学全集11 古今和歌集』(小沢正夫・松田成穂校注・訳、小学館、一九九四年)
- ・『新編日本古典文学全集13 土佐日記 蜻蛉日記』(菊地靖彦・木村正中・伊牟田経久校注・訳、小学館、一九九五年)
- ・『新編日本古典文学全集20-25 源氏物語①-⑥』(阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳、一九九四年)

(東北大学大学院文学研究科前期課程在籍)